

ナショナルバイオリソースプロジェクト実験動物メダカ
平成18年度 第1回研究運営委員会
議事録

日時 : 平成18年8月23日(水) 13時06分-14時34分

場所 : 名古屋大学グリーンサロン東山 会議室

出席者 : 長濱嘉孝(議長)、井口泰泉、石川裕二、工藤明、近藤寿人、酒泉満、武田洋幸、
三谷啓志、若松佑子、(以下オブザーバー) 荒木和男、古賀章彦(書記)、田中実、成瀬清

欠席者 : 岡本 仁、柴田直樹、堀 寛、山崎由紀子、(以下オブザーバー) 木下政人、安増茂樹

報告・議事

1. 中核機関活動報告

(1) 若松より、資料に基づき、報告があった。

2. 平成17年度評価報告書の検討と対応

(1) 若松より、つぎのように説明があった。

・総評は、5段階評価の4であった。

・収集・保存・提供の事業についてリソースの整備の進捗が評価されたほか、問題点を数点指摘された。

・そのほか、リソースの質の高さ、MTAの整備、将来像、系統の定義および命名法の公表などが、高く評価された。

3. メダカシステムの収集・保存・提供活動の報告

(1) 若松より、名古屋大学での活動について資料に基づき、報告があった。

・外国からの依頼が年ごとにふえているという特徴がある。これは、メダカの事業が国際的に評価されていることを示す。

(2) 石川より、放射線医学総合研究所での活動について、資料に基づき報告があった。

・HNI と Hd-rR の依頼が多いことが目立つ。

(3) 酒泉より、新潟大学での活動について資料に基づき、報告があった。

・近縁種の新たな収集が進捗している。

(4) 工藤より、東京工業大学での活動について資料に基づき、報告があった。

・サブ機関としての機能は平成19年末に終了する予定である。このため、時期バージョンで予定されるメダカリソースセンターへのリソースの移管の準備をすすめている。

・NBRPの事業でない「開発」と、事業である「収集・保存・提供」との境界を明確にすべき、との意見が出され、これについて議論をした。両立できるように折り合いをつけることが望ましい、との見解で一致した。また、次期バージョンに向けて議論を深める必要がある、との認識で一致した。

(5) 近藤より、SORSTでの活動について資料に基づき、報告があった。

(6) 提供した試料のフォローアップを確実にする必要がある、との意見が出された。可能な範囲では実現しているものの、さらなる留意は必要、との見解で一致した。

4. 平成18年度推進事業の進捗状況

- (1) 各事業の推進担当者から事業の進捗状況について報告があった。
- ・近縁種の新たな収集が進捗している（酒泉）。
 - ・東京工業大学の水槽を三重大学に移管する（工藤）。
 - ・データベースの整備をさらに進めている（近藤）。
 - ・始原生殖細胞の凍結保存法の開発を考えている（武田）。

5. その他

- (1) メダカブック、組織アトラスの構築の進捗状況が若松より報告された。
- ・血管の組織アトラスが東京工業大学より新たに追加された
- (2) 若松より、海外への成魚の提供について、つぎのように報告があった。
- ・成魚の提供の要望が多く、これに応えるため、可能なものから成魚の提供を始めた。
 - ・成魚の輸送はワールドクウリアー社に依頼している。
 - ・必要経費は依頼者の負担としている。
- (3) 成瀬より、英語のプロトコール集について、つぎのように報告があった。
- ・成瀬ほか3名が中心となってすすめている。
 - ・Blackwell 社からの出版となる予定である。
- (4) 本としてのプロトコール集と、ウェブに載せるメダカブックとの関係について議論し、それぞれに利点があるので両方すすめるのがよい、との意見が大勢となった。

平成18年度 第1回メダカ遺伝資源小委員会
議事録

日時 : 平成18年8月23日(水) 14時47分-17時08分

場所 : 名古屋大学グリーンサロン東山 会議室

出席者 : 長濱嘉孝(議長)、井口泰泉、石川裕二、工藤明、近藤寿人、酒泉満、武田洋幸、
三谷啓志、若松佑子、(以下オブザーバー) 荒木和男、古賀章彦(書記)、田中実、成瀬清

欠席者 : 岡本 仁、柴田直樹、堀 寛、山崎由紀子、(以下オブザーバー) 木下政人、安増茂樹

報告・議事

1. 前回の議事録(案)の確認

平成17年度第1回メダカ遺伝資源小委員会議事録に記載の内容を確認した。これに基づいて今後の議論をすすめることを確認した。

2. 今回の小委員会の目標

次期バージョンのための担当機関の選定が今回の目標であることを確認した。

3. 候補とする機関の確認

名古屋大学、新潟大学、基礎生物学研究所、東京工業大学の4つを候補とすることを確認した。

4. 各機関の状況の説明

(1) 酒泉が、新潟大学は受け入れが可能であることを説明した。

(2) 田中が、基礎生物学研究所は受け入れが可能であることを説明した。

(3) 工藤が、基礎生物学研究所が担当しない場合は東京工業大学での担当を検討することを説明した。

(3) 若松から、名古屋大学は若松が次期プロジェクトの途中で定年退職の予定であるため、担当機関となることを辞退する旨の説明があった。

5. 担当機関の選定

新潟大学と基礎生物学研究所を担当機関として選定した。

6. 拠点機関の選定

拠点機関について、新潟大学は野生集団と近縁種のライブストックを、基礎生物学研究所は近交系と自然突然変異体のライブストックと突然変異系統・自然突然変異系統の凍結精子の保存、ゲノム情報の維持管理を主務とすることが議論された。機関の規模や特性を考慮すると、基礎生物学研究所を中核機関とすることが望ましい、との意見が出たため、基礎生物学研究所を中核機関とすることで合意した。